

2025年度 八戸学院大学短期大学部

幼児保育学科・介護福祉学科 一般選抜Ⅰ期

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
2. 筆記用具は黒色の鉛筆またはシャープペンシルを使用すること。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁に気付いたときは、手を挙げて監督者に知らせること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。
5. 問題冊子は持ち帰ってよい。

【I】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ことばは世界に存在する雑多なモノを、1体系化し、①セイリする。それによって、子供は、同じことば（名前）で呼ばれるモノ同士を「同じ」あるいは「似ている」と感じ、それらのモノ同士の共通点を探るようになる。しかし、2「似ている」や「同じ」という認識は、モノ同士の直接の関係に限らない。

ここで、次のような状況を想像してみよう。三つの色のカラーボックスが、②タテに上から緑、黄色、青の順で三つ重ねられている。これはお母さんの三つのボックスだ。子供はそれよりも少し小さい自分のボックスを三つ持っていて、そちらは、上から黄色、赤、白の順番に並んでいる。子供のボックスの中段に、シールが入った封筒が入っている。お母さんは自分の三段重ねの真ん中の黄色のボックスに封筒を入れて見せ、子供に、「○○ちゃんのにも、同じところにシールが入っているのよ。探してね。」と言う。3子供は何色のボックスを探せばよいだろうか。

読者のみなさんは、この状況で「同じ」というのは、そもそも曖昧であることに気づかれただろうか。色が同じボックスなのか、位置が同じボックスなのか。位置を表すことば、たとえば上とか下とか、右とか左とか、中央とかということばは、モノ自体をさすのではなく、モノ同士の位置関係をさす。このようなことばを使うとき、モノそのものが「同じ」なのは関係なく、関係が、ことばのさす③タイショウになる。

先ほどの問題に④モドると、大人はこの状況で「同じところにシールが入っている」と言われれば、中段のボックスのことだと思う。しかし、三、四歳の幼児はほとんどの場合、一番上の黄色のボックスを開けてシールを探す。つまり、このくらいの年の子供は、「黄色のボックス」のような、「モノそのもの、あるいはモノの色が同じ」ことにはすぐ気づくが、「関係が同じ」ことにはなかなか気がつかない。この状況のように、「モノ、あるいはモノの目立つ色が同じ」と「関係が同じ」ことが同居している場合、4モノが同じほうにばかり目がいつてしまうので、関係の類似性には全く気づかない場合が多い。一回、大人が正しい場所を教えて見せればすぐわかるはず、と思われるかもしれないが、実はそうではなく、何回か正しいほうを教えても、子供は気づかず、色が同じ箱を開け続ける。

（A）「上」とか「真ん中」ということばを使うと、同じ年の子供でも、モノそのものではなく、モノ同士の位置関係へ注目することが

可能になる。つまり、「上」「真ん中」「下」のような関係を表すことばは、子供の認識をモノ自体の認識から、もつと抽象的な「関係」の認識へと広げる役割を果たすのである。

モノではなく、関係の同一性を学習することは、チンパンジーをはじめとした人間以外の動物にとって、⑤キヲめて困難だといわれる。人間の子供にとっても、関係の認識は難しいが、関係を表すことばを持ち、それを学習することで、人間はモノの類似性、同一性のみでなく、（B）の類似性、同一性に基づいて世界を分類することが可能になるのである。そのように考えると、言語は、人間以外の動物にはできない抽象的な思考を人間の子供がすることを可能にする、といってもよい。

今井むつみ『ことばと思考』より

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部1「体系化」の意味を次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 物事をまとめ秩序づけること

イ 物事を名付けること

ウ 物事を識別すること

エ 物事を把握すること

問三 傍線部2『「似ている」や「同じ」という認識は、モノ同士の直接の関係に限らない。』とあるが、「モノ同士の直接の関係」に当たらないものをア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア AもBも青色である。

イ AもBも机の上にある。

ウ AもBも犬である。

エ AもBも三角形である。

問四 傍線部3「子供は何色のボックスを探せばよいだろうか。」とあるが、大人の場合は何色のボックスを選ぶのか答えなさい。

問五 傍線部4「モノが同じほうにばかり目がいつてしまうので、関係の類似性には全く気づかない」とあるが、なぜ子供は大人のように「関係の類似性」に気づくことができないのか。三十字以内で書きなさい。

問六 (A) にあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア だから イ しかし ウ さらに エ つまり

問七 (B) にあてはまる語句を文中から漢字二字で抜き出して書きなさい。

問八 「言葉」について、あなたの考えを百字以内で書きなさい。

【Ⅱ】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【高校生の「私」は合唱コンクールで指揮者を務めたが、クラスをうまくまとめられなかった。後日行われた校内マラソン大会で、「私」は息が苦しく、最後尾を走っていた。】

土手の上に佇^{たたず}んでいると、遠くから①イセイのいい自転車が来るのが見えた。見えたと思うまにぐんぐんこちらへ近づいてくる。乗っているのは小ぶりの入道のような男だ。危険を感じて土手の端に寄ったのに、私をめがけて突き進んでくる。立ちすくむ私の真ん前で、自転車は急ブレーキをかけた。驚いていると、走れえ、と自転車の入道が怒鳴った。どこかで見たような顔だと思ったら、先生だったらしい。慌てて

走り出す私のすぐ後ろを、走れ、走れ、と自転車で追いかけてくる もう走れないんだよう、と口の中だけで言って、半分泣きそうになりながら土手から歩道へ下りて走る。足が痛い。②ワキバラも痛い。学校まではまだ遠い。息が上がリ、心臓が飛び出しそうだ。先生はどこまでもついてくる。どうやらほんとうに私が最後の生徒だったらしい。

校門をくぐると、すでに③ビヒンの後片づけをしている生徒や先生が目に入る。私のすぐ横を④バンソウしていた自転車がそこようやく止まる。「フアイトフアイト！もう一息だ！」

かろうじてうなずいてみせる。足がもう前に出ない。まだこれからグラウンドを一周しなければならないなんてつらすぎる。自転車置き場の横を過ぎ、体育館の裏手を通り、やっとグラウンドが見えてくる。ジャージの生徒たちが散らばっている。その明るい場所へ、私は一向に近づいていかないうな気がする。走っているのか歩いているのか自分でもわからない。足は上がっているのか、地を這っているだけなのか。それより、この心臓はだいたいどうぶなのか。耳か、頭か、もしかすると目の奥が、ガン、ガン、ガン、と規則正しく鳴っている。

汗だくになって走りながら、私の目はトラックの茶色しか見ていない。私の耳は、ガン、ガン、ガン、——と、それから①かすかな旋律をとらえる。どこからか、歌が聞こえる、ような気がする。最初はひとつの声。か細い、頼りない旋律だったのが、次第に声が集まって大きく力強くなっていく。幻聴？ではない。荒い息と心臓の⑤コドウと耳鳴りと、それらを超えて歌が聞こえる。何の歌だかわからなかった。ただ、どこかで聞いたことのある歌だと思った。顔を上げて、あたりを見る。足がふらつき、視界が揺れる。その隅に、ジャージの団がかたまっているが見える。ふたり、三人、と集まってくる。まんなかにいるのは短パンの小柄な生徒だ。

②はつとした。まさか、と思う。これはもしかして、あの歌、だろうか。あの、私たちが合唱コンクールで歌った歌。最後までうまく歌えなくて、それどころかクラスが全然まとまらず、わずかな自信までなくしていた。あのときの歌とは、まるで別の歌に聞こえる。でも、たしかにあの歌だ。こんな歌だったのか。こんなに素朴で、いきいきと生きるよろこびを歌った歌だったとは。若草が薫り、雲雀が舞う空の下で、若い娘たちが裸足で戯れながら歌を歌っている。トラックを走りながら、目の前にその光景が浮かぶようだ。

③私はまったく考え違いをしていた。歌わせよう、歌わせようとした。技巧を重視して、歌う動機も気持ちも置き去りにした。薄暗い教室で、譜面から目を離さず、注意ばかり飛ばして歌わせる歌では決してなかった。聴かせよう、感動させようと歌う歌でもない。これは、まぎ

れもなく彼女たちの歌、そして私たちの歌だ。

足が震えそうだ。胸が高鳴っている。マラソンのせいばかりではない。4 歌のはじまりに私たちは立ち会っている。ここにいるみんなが、何もなかったこの場所に歌のはじまることを確かに見た。

もともと、歌のはじまりはこういうものだったのかもしれない。同級生たちが私に向かって——おそらくは学校一、足の遅い私を励ましために——いつのまにか声を合わせたように。その自然な感情の高まりこそが歌だったんじゃないか。足を引きずり涙を拭いながら私は走っている。歌声が大きくなる。あと少しで、ゴールだ。

宮下奈都「よろこびの歌」より

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部1「かすかな旋律」とあるが、この「旋律」は、どのように聞こえ方が変化していったか。それがわかる一続きの二つの文を文中から探し、初めの五字を答えなさい。

問三 傍線部2「はっとした。まさか、と思う。」とあるが、このときの「私」の歌に対する気持ちについて説明した次の文のⅠ、Ⅱにあてはまる言葉を、Ⅰは十三字、Ⅱは十六字で、それぞれ文中から書き抜きなさい。

(Ⅰ) だと思っていたものが、 (Ⅱ) ではないかと気づき、驚いている。

問四 傍線部3 「私はまったく考え違いをしていた。」とあるが、「私」はどのように考え違いをしていたのか。六十字以内で答えなさい。

問五 傍線部4 「歌のはじまりに私たちは立ち会っている。」とあるが、この場面で、「私」は、誰がどのように歌った様子を「歌のはじまり」だと感じているのか。五十字以内で答えなさい。

【Ⅲ】次の文の傍線部が慣用句となるように、（ ）にあてはまる言葉として最も適当なものをあとのア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

① 保身のための言い訳に聞こえ、どうにも（ ）に落ちない。

ア 心 イ 胸 ウ 腑 エ 気

② 叱られているところを見られて、（ ）が悪い思いをした。

ア 機 イ 間 ウ 真 エ 情

③ こんなに多くリーダーがいては船頭多くして船（ ）に登るようなものだ。

ア 下 イ 底 ウ 山 エ 頭

【Ⅳ】次の四字熟語の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。(解答欄には二字だけ記入)

- ① チーム内で争いごとが起こらないのはオンコウ篤実な彼女のおかげだ。
- ② 彼は成功者として、イキ揚揚と故郷に帰ってきた。
- ③ 母親は、子どもの無事を一心フランに祈った。

〈問題終了〉